

English as a Lingua Franca (ELF) とアイデンティティ¹

～本校生徒を対象とした事例研究～

齋藤 浩一
（英語科）

要 旨

現代の国際社会では、言語や文化を共有しない人々同士のコミュニケーションにおいて、一般的に英語が共通語として使用されている。そのようなコンテキストでは、全ての人が正当な英語「使用者」として認められている一方で、日本人の多くは英語「学習者」としてのアイデンティティのみが確立され、その結果、国際的なコミュニケーションの場で消極的になってしまうことが指摘されてきた。

以上を踏まえ、本論文では本校生徒の英語使用場面におけるアイデンティティを、ELF の観点から論じる。質問紙調査とインタビュー調査を通して、本研究に参加した生徒たちは国際コミュニケーションにおける英語の役割を認識していることが明らかになった。また、国際交流経験の豊富な生徒は、英語「学習者」としてだけでなく「使用者」としてのアイデンティティも形成していることが読み取れた。一方で、収集したデータをより詳細に分析した結果、「標準英語」²の基準のみを遵守する「学習者」としてのアイデンティティの方が大きく占めていることも示唆された。これらの結果を踏まえ、本論文では中等教育機関における ELF の教育的可能性について論じる。

Keywords: 共通語としての英語（English as a Lingua Franca、ELF）、アイデンティティ、国際コミュニケーション、異文化コミュニケーション

はじめに

現代の国際社会において、言語や文化を共有しない人々同士のコミュニケーションでは、英語が共通語としての役割を果たしており、その結果、英語は母語話者だけでなく世界中の人々によって使用されるようになった（Jenkins, 2009; Seidlhofer, 2011; Murata, 2021; Widdowson, 2015 他）。

このような状況を踏まえ、（特に社会言語学の分野において）多くの研究者たちが、人々のバックグラウンドに関わらず、全ての英語変種は平等に受け入れられるべきであり、常に標準英語の基準のみに則って評価されるべきではないとの主張をしている（Jenkins et al.,

2011; Seidlhofer, 2011; Widdowson, 1994 他)。ところが、このような潮流に反して、英語を外国語として学習した経験のある人は、自身を英語使用者ではなく（能力が不完全な）英語学習者と評価したり (Virkkula & Nikula, 2010)、その結果標準英語の基準のみを厳格に遵守することを意識したりすることが明らかになってきている (Iino & Murata, 2016)。その結果、そのような人々は、人前で失敗をして恥をかいたり、相手から低く評価されたりしないよう、英語でコミュニケーションを図ることに対して消極的になってしまう傾向がある (Kohn, 2018; Murata, 2016)。

このような英語使用場面における否定的なアイデンティティは、国際コミュニケーションの場で問題を引き起こす可能性が十分にある。というのも、特に学術やビジネスの場において、言葉や文化を共有しない人々と英語でコミュニケーションを図る機会は増えてきており (Murata et al., 2018)、また、対話する相手は必ずしも英語母語話者ではないからである (Murata et al., 2017; Murata et al., 2018)。以上を踏まえ、本研究では本校生徒のアイデンティティを ELF の観点から明らかにする。

本論文では、まず第 1 節の各項では、本研究の背景となった先行研究を振り返る。第 2 節では本研究の手法を、第 3 節では研究結果を報告する。最後の第 4 節では、本研究結果を踏まえ、ELF の（特に中等教育機関における）教育的可能性を論じる。

1. 背景

本節では、まず ELF の一般的な定義を述べた後、ELF コミュニケーションで重視される能力について、これまでの研究をもとに紹介する (1-1.)。その後、日本人の英語使用場面におけるアイデンティティに関する先行研究を報告し、ELF コミュニケーションにおいて求められる能力との乖離を指摘する (1-2.)。

1-1. 共通語としての英語 (English as a Lingua Franca, ELF)

これまでも繰り返し述べているが、現在の国際社会では、英語は共通語としての役割を果たしており、多言語話者間のコミュニケーションで頻繁に使用されている (Seidlhofer, 2011)。このような英語の使用状況を鑑み、ELF は言語や文化を共有しない人々同士がコミュニケーションを図る際に使用される英語と一般的に定義される (Jenkins, 2015; Seidlhofer, 2011 他)。このように、英語は所謂英語圏の国々だけでなく世界中で使用されており、その結果、共通語として英語が使用されているコミュニケーションでは英語を母語としない人々も英語使用者として認められるべきだの主張が近年は多く見受けられる (Jenkins, 2015; Murata, 2016; Seidlhofer, 2011; Widdowson, 1994 他)。

ELF は 2000 年代から本格的に発展してきた比較的新しい分野で、これまで多くの科学的

な研究がなされてきた。当初は共通語として使われる英語に共通する特徴（例えば音声的な特徴や、語彙レベルでの特徴等）を見出そうと研究が進められてきたが（Jenkins, 2000 等）、分野の発展に伴い ELF の流動性が指摘され、以降はそれぞれコミュニケーションにおける可変的な英語使用に焦点が当てられてるようになった³（Dewey, 2013; Widdowson, 2015）。

ELF 研究の中で、特に本研究と関係しているのが、多くの研究者（Hynninen & Solin, 2018; Margić, 2017; Seidlhofer, 2018）によって指摘されてきた国際コミュニケーションにおいて求められる能力についてである。これまでの多くの研究によると、言語や文化を共有しない人同士のコミュニケーションの場においては、標準英語のみが唯一の「正しい英語」ではなく、その状況に応じて規範は流動的に変化し、対話者同士がお互いに理解できるよう調整することが明らかにされてきた（Cogo, 2012; 2018; Hynninen & Solin, 2018; Widdowson, 2015 等）。そのため、Seidlhofer and Widdowson (2017) や Widdowson (2015) はそのような場面では、特定の規範に則って英語を使う「学習者」としての能力よりも、自身の言語知識を状況に応じて柔軟にかつ創造的に活用できる「使用者」としての語用論的能力が求められると主張している。

本項では、ELF の定義と、共通語として英語が使われる場面で必要な能力について、これまでの先行研究をもとに紹介してきた。次項では、ELF とアイデンティティ形成の関係性に関する先行研究の結果を振り返る。

1-2. ELF とアイデンティティ

前項では、国際化に伴い英語が多様化し、それぞれの変種を平等に扱う必要性が説かれていることを紹介し、また、国際コミュニケーションで求められる能力についても言及した。このように、現代の国際社会では共通語として英語が使用されており、近年、そのような環境における人々のアイデンティティに関する研究が、まだその数に限りはあるが、行われている（Baker, 2009; Jenkins, 2007; Nogami, 2020; Iino & Murata, 2016 他）。

例えば、Virkkula and Nikula (2010) は、ヨーロッパのコンテクストで、大学生の英語使用場面におけるアイデンティティの変遷を調査した。研究対象となったフィンランド人の大学生は、ドイツ⁴にインターン生として留学する前と後でアイデンティティに変化が見られたのである。まず、ドイツに渡る前のアイデンティティであるが、全体的に自身の英語を低く評価する傾向が見受けられた。この理由としては、学生は学校以外で英語に触れる機会がなく⁵、そのため学校での学習経験が影響していると考えられる。このことから、フィンランドの学生はドイツに留学する前は「学習者」としてのアイデンティティを持っていたことが窺える。ところが、ドイツから帰ってきた後のインタビューでは、留学先で実際に ELF コミュニケーションを経験したことにより、彼らのアイデンティティは「学習者」

から「使用者」に変化していたのである。例えば、ドイツに渡る前は英語でのプレゼンテーションに苦心していた学生も、日々英語でコミュニケーションを図るうちに、その苦勞が消え、最終的には能動的な英語使用者へと変化していた。

ELF 環境におけるアイデンティティに関する調査は、日本でも行われている。Iino and Murata (2016) の研究では、EMI コース⁶に在籍する日本人大学生のアイデンティティが明らかにされた。彼らの研究対象となった大学生は、留学生や帰国生、あるいはインターナショナルスクールを卒業した学生が一定数おり、いわゆる日本の中等教育機関を卒業した生徒たちは自らを「純ジャパ」と呼んでいる。その「純ジャパ」は、EMI コースに参加した当初は、これも標準英語の基準に則って判断している証拠なのであるが、周囲の学生との英語の流暢さの差に圧倒される傾向にある。しかし、その EMI コースに 4 年間在籍し、ELF コミュニケーションを経験することで、語学力以外のコミュニケーション能力にも気が付き、最終的には英語「使用者」としてのアイデンティティを確立した。

このように、ELF とアイデンティティに関する研究は近年発展を遂げているが、その殆どが高等教育機関をセッティングとして行われている。そこで本研究では、今まで光が当てられてきていなかった中等教育機関の生徒を対象に、彼らのアイデンティティに関する調査を行い、ELF の教育的可能性を探求する。

2. 本研究

本節では、初めに研究手法を簡潔に紹介する (2-1.)。その次に、収集したデータの分析から明らかになったことを、実際の回答を抜粋しながら報告する (2-2.)。

2-1. 研究手法

2020 年度に実施された本研究は、当時高校 1 年生だった本校生徒 3 名を対象とした。彼らは、筆者が主催する‘Language and Communication’というコースタイトルの講座を履修していたため、研究対象として選出された。本紙では、彼らの匿名性を維持するため、仮名で言及する。以下の表は、その彼らのバックグラウンドに関する情報である (データの収集方法については、次段落を参照のこと)。

表 2.1. 参加者の基本的情報

名前(仮名)	海外滞在歴(2週間以上)	滞在国	滞在期間	目的
タケシ	あり	イギリス	2週間	サマースクール
ユウジ	なし	NA	NA	NA
ケント	なし	NA	NA	NA

アイデンティティは状況に応じて柔軟に変化するものであり、そのため、特に言語使用場面におけるアイデンティティの探究を目的している研究の多くは、データの収集方法として質的調査を採用してきている (Block, 2007; Nogami, 2020; Norton, 2013 等)。本研究も先行研究に倣い、質的アプローチでデータを収集することとした。収集方法としては、自由記述のアンケート調査と個別インタビューを行い、多角的にデータを収集することで、分析結果の妥当性を高められるようにした (Dörnyei, 2007)。自由記述のアンケートは、そのデータ収集の簡便性から、Google Forms 上で実施した。アンケートは2つのパートからなり、それぞれ基本情報と英語使用に対する意識に関する質問で構成されている。その後、そのアンケート結果に基づき、個別インタビューも実施した。インタビューはカジュアルな雰囲気で行われ、使用言語は両者の第一言語である日本語であった。インタビュアーである研究者は、事前に尋ねる質問は準備していたが、そこから派生する話題についても尋ねる半構造的インタビューの形式を採用した。

インタビューデータは研究者自身が書き起こしを行い、アンケートのデータと併せて、収集後はナラティブ・インクワイアリの手法を用いて質的に分析した (Creswell & Poth, 2018 他)。ナラティブ・インクワイアリは「個人によって語られる実体験に焦点を当てる」(Nogami, 2020: 420, 著者拙訳)、また「研究対象者を研究の中心に見据える」(Takino, 2016: 118, 著者拙訳)というイーミックな視点を保てる性質から、本研究の目的と合致していると考えられる。

次項では、以上の手法で収集・分析されたデータから明らかになったことを、研究対象者の ELF に関する認識と、彼らの英語使用場面におけるアイデンティティに焦点を当てて報告する。

2-2. 研究結果

本項では、2-1. で説明した研究手法で収集したデータの分析結果を、データの一部を抜粋しながら紹介していく。

2-2-1. ELF に関する認識

研究対象者に共通していたことの一つは、彼らは英語が共通語として国際的なコミュニケーションの場面で使用されているということを知っていたことである。確かに、このような事実はもはや一般常識として広まっていることかもしれないが、彼らが実体験を通してその事実を知っていたことは特筆に値するであろう。

例えば、以下の2つの抜粋は「どのように英語の国際的な役割に気がついたか」というインタビュー中の質問に対する回答である。

抜粋 2-1

留学生をお兄ちゃんが家に呼んで来たことがあるんですけど、イタリア人がイギリスの学校に進学してから日本に来るみたいな感じで。そのイタリア人の人も[……]英語を話していたし、みんな話しているのかなっていう。

(ケント、インタビュー中の発話)

抜粋 2-2

(当時 WHO の会長であったテドロス氏の例を上げながら) あの人、多分、英語が母国語じゃないんだらうなっていう感じですけど、全部、発表するときとか、その人が大体発表していますが、英語で言っているので、母国語と違って結局使うようになるのかなって実感しました。

(ユウジ、インタビュー中の発話)

ケントは、抜粋 2-1 でも述べられている通り、英国の学校に在学するイタリア国籍の留学生をホストファミリーとして受け入れた経験がある。その当時、その留学生との英語でのコミュニケーションを実際に経験することで、英語使用者の多様性を認識したようで、「みんな話しているのかな」という発言の中の「みんな」には、所謂非英語母語話者も含まれているのではないかと推測できる。

一方、抜粋 2-2 を発したユウジは、ケントのように実際に ELF コミュニケーションを経験した経験はほとんどない。しかし、当時 WHO 会長のテドロス氏の声明をニュース等で聞くことで、英語の共通語としての役割を実感していた。

以上の抜粋によると、実際に所謂非英語母語話者が、英語が共通語として使用されているコミュニケーションを実際に経験したり、あるいは経験しなくても触れたりすることで、英語の共通語としての役割を認識したことが読み取れる。このことを認識することは、多様なバックグラウンドを持つ人々とコミュニケーションを図る必要のある国際社会で生き抜いていく彼らにとって、肯定的な変化であると考えられると同時に、ELF に触れる経験をするものの教育的意義が示唆される。

さらに、ELF コミュニケーションを経験することは、英語の共通語としての役割を認識するだけでなく、ともすると英語使用場面におけるアイデンティティにも影響を及ぼすことが研究結果から読み取れた。次では、ELF コミュニケーションを経験することで、普段の教育現場で形成された英語「学習者」としてのアイデンティティに加え、英語「使用者」としてのアイデンティティも確立した例を紹介する。

2-2-2. 英語「学習者」から「使用者」へ

もう一つ別の研究結果として、ELF コミュニケーションが研究対象者に及ぼしたアイデンティティの変化である。この変化は、3人中1人にしかみられなかったが、これまでの先行研究（Iino & Murata, 2016; Murata, 2016 等）でも示唆されてきた通り、国際的なコミュニケーションに触れることの教育的意義を見出すことができる。以下の抜粋は、研究対象者の1人が2週間の英国留学を通して学んだことについて振り返った時の発話である。

抜粋 2-3

一番大きいのが、正しく伝えようとするんじゃなくて、明確に伝えたいという意志を持つ方が大事かなっていう。

(タケシ、インタビュー中の発話)

タケシは英国滞在中、留学先の学校が所有する学生寮に滞在した。そこには世界中から同年代の学生が集まっており、そのほとんどが所謂非英語母語話者であり、お互いに母語や文化を共有しないため、1-1.で紹介したように共通語として英語、すなわち ELF が使用されていたようである。

まず、抜粋 2-3 の前半部分に注目すると、英国留学前は「正しく伝えようとする」ことを重視する所謂「学習者」としてのアイデンティティのみを持っていたことが読み取れる（Nogami, 2020 等を参照のこと）。これはやむを得ないことで、インタビュー内でも明らかになったように、留学前、タケシは学校と塾でしか英語に触れる機会がなく、英語は学習する対象であった（Murata, 2016 等を参照のこと）。

ところが、英国留学中に経験した ELF でのコミュニケーションを通して、タケシは抜粋 2-3 の後半部分にあるように、相手に「明確に伝えたいという意志」の大切さに気がついたようである。このことは、1-1. でも言及した国際コミュニケーションにおいて特に重要なコミュニケーション能力とも通じるものがあり、相手に伝えようとする意志を持つことは創造的に言語を運用するための出発点であると言えよう。このように、タケシは英国での ELF コミュニケーションを通して、特定の規範のみに則って英語を使用する「学習者」だけでなく、自身の知識を創造的に活用して英語を使用する「使用者」としてのアイデンティティも構築されたと考えられる。

2-2-3. アンビバレントなアイデンティティ：「学習者」と「使用者」

前の段落では、国際的なコミュニケーションを通して、英語「使用者」としてのアイデンティティを確立した研究対象者の例を報告してきた。しかし、彼のインタビューをより注

意深く分析すると、留学を経験した後でも英語「使用者」としてよりも英語「学習者」としてのアイデンティティの方が無意識下で強く根付いていることが読み取れた。以下の抜粋は、いずれもタケシのインタビュー中の発話である。

抜粋 2-4

実際のコミュニケーションだと通じるけど、塾とか例えば、どうしても試験に向けてとか（だと通用しない）。

（タケシ、インタビュー中の発話、強調筆者、括弧内は筆者補足）

抜粋 2-5

伝わるけど、自分で満足はできていない。[…] 今の成績を見ていると。

（タケシ、インタビュー中の発話、強調筆者）

まずは抜粋 2-4 についてであるが、この場面では「標準英語の規範に則っていない英語についてどのように思うか」ということが尋ねられた。タケシによると、彼の英国での成功体験を振り返りながら、「実際のコミュニケーションでは通じる」と評する一方、試験という教育的なコンテキストでは通用しないと指摘している。これは高校生であるタケシには当然のことであり、学校や塾という教育機関における成功（例えば、試験で高い点数をとる）が象徴資本（Nogami, 2020; Norton, 2000 等を参照のこと）の獲得につながるため、英語「使用者」としてのアイデンティティよりも、「学習者」としてのアイデンティティの方が重視されることは、あるいは自然であるのかもしれない。

抜粋 2-5 でも、タケシの「学習者」としてのアイデンティティが読み取れた。今度は「自身の英語をどのように評価するか」という質問に対する返答である。抜粋 2-3 にあった通り、タケシは英国での留学経験を通して、言語の正確さの他にもコミュニケーションを成立させるのに重要な要素があることに気が付くことができたが、抜粋 2-5 の前半部分では、自身の英語に満足できておらず、その理由としては自身の成績が挙げていた。このことから、タケシは実際のコミュニケーションでは成功体験をしているものの、自身の英語については否定的に捉えており、それは学校での成績に基づく評価であることが読み取れる。

上述の2つの抜粋からは、2-2-2 で読み取れた留学でのコミュニケーション経験を通して確立した英語「使用者」としてのアイデンティティよりも、教育的なコンテキストにおける評価を基準として自身の英語を評価する英語「学習者」としてのアイデンティティの方が彼の中で大きな部分を占めていることが明らかになった。

ここで注意しておきたいのだが、本研究はアイデンティティのアンビバレンスを批判し

ているわけではない。Virkkula and Nikula (2010) が指摘する通り、アイデンティティは画一的なものではなく、むしろ状況に応じて刻一刻と変化していくものである。そのため、タケシのアイデンティティの柔軟性も自然なものであり、その多様性を深く追求するためにも本研究は質的研究手法を採用したのである。ただ、抜粋 2-5 であるように、英語「学習者」としてのアイデンティティを持つことにより、自身の英語を否定的に評価することに繋がってしまうことは、生徒にとっては不利益であろう。次節では、本節で紹介した研究結果を踏まえて、ELF の教育的可能性を考察する。

3. ELF の教育的可能性

本節では、前節で紹介した研究結果を踏まえ、ELF の教育的な可能性を追求する。

まずは、2-2-1.でも指摘した通り、実際に ELF コミュニケーションを経験することは有意義であろう。本研究の参加者が全員そうであったように、実際に様々なバックグラウンドを持つ人が英語を使用している場面に遭遇すると、英語の多様性を実感し、自分も英語使用者の 1 人であるということを実感する良い機会になる。ただし、例えばヨーロッパとは異なり、日本においては学校の外においてそのような経験をする機会が極端に限られている。そのため、教室内において、例えばニュース等のオーセンティックな教材を用いることにより、英語の多様性に触れる機会を提供することはできるかもしれない。また、COVID-19 の影響で暫く中断しているが、本校の国外研修制度を有効活用することも一つの手であろう。研修が再開されれば、6 カ国（英国・オーストリア・韓国・中国・ドイツ・フランス）の協定校に派遣されたり、逆に協定校から研修生が派遣されたりしてくる。その機会には限りがあるが、現地校の生徒や留学生との英語を交えたコミュニケーションを経験することで、ELF の本質や性質を認識し、結果的に 2-2-2.でも紹介したように英語「使用者」としてのアイデンティティが形成されるであろう。

一方で、英語「学習者」としてのアイデンティティは、2-2-3 でも指摘したが、特に高校生には深く根付いているものであることが予想される。このこと自体を批判するつもりはないが、その結果として「学習者」である自身の英語を否定的に捉えてしまう傾向は改善する必要があるだろう。そのためには、実際のコミュニケーションで認識した ELF の本質や性質を、知識として体系的に身につけることが有効的な解決策の一つとして考えられる。Saito (2019) では、米国での留学後に ELF に関するコースを履修した大学生は、留学で得た ELF に関する感覚を結晶化することができ、結果的により自信を持った英語「使用者」としてアイデンティティを確立できたことが明らかになった。このようなポリシーで、筆者は 2019 年度から ELF を主題とした講座(2019 年度は ‘World Englishes and English as a Lingua Franca’、2020 年度以降は ‘Language and Communication’ というコースタイトル) を開講し

ている。履修生のアイデンティティの変化を追跡することは、このコースの教育的意義を
探求していくためにも価値のある研究課題であろう。

おわりに

ELF は応用言語学の分野では比較的歴史が浅く (Jenkins, 2017; Widdowson, 2015)、その
ため、本研究の生徒たちがそうであったように、共通語として英語が使用されていること
は一般的に広く認知されているが、一方でその本質や性質は (少なくとも日本社会におい
ては) 十分に浸透していないようである。

現代の国際社会では、非英語母語話者も正統な英語使用者として見做され、他者と対等
に英語でコミュニケーションを図る権利を持っている。ところが、この事実を知らぬまま
大学に進学したり社会に出たりすると、言語や文化を共有しない人々とコミュニケーショ
ンする際に自分の英語に自信が持てず、尻込みしてしまう傾向がある (Murata & Iino, 2018
等)。筆者が担当する講座が、本校生徒が世界で活躍する真のグローバル人材に必要な資質・
能力育成の一助となることを願っている。

脚注

-
- ¹ 本論文は、Saito (2020) を、田中&齋藤 (2021) を参照しながら推敲した版である。
 - ² 一般的に「標準英語」という言葉は使用されているが、応用言語学、特に ELF の分野
では、その実態について懐疑的な立場をとる研究者も多い (Jenkins, 2015; Milroy, 1999;
Seidlhofer, 2018 他)。そのため、ここでは括弧付きで表しているが、本文ではその読み
やすさを優先するため、括弧を外して記載する。同様に、「英語母語話者」と「非英語
母語話者」という用語についても議論がされているが (Jenkins, 2015; Seidlhofer, 2011
等)、読みやすさを優先するために括弧は付けずに記載する。
 - ³ ELF パラダイムの発展に関する詳細については、Jenkins (2017) や Widdowson (2015)
を参照のこと。
 - ⁴ 研究対象の大学生たちは、インターン先の職場ではドイツ語の使用を求められていた
が、職場の外では共通語として英語を日常的に使用していた。
 - ⁵ フィンランドでは、メディアやポップカルチャー等で人々は英語に触れる機会が多く
あるが (Leppänen & Nikula 2007, Virkkula & Nikula, 2010 でも引用)、研究に参加した
学生たちは「英語使用＝英語に触れる機会」と認識していたため、このような判断を
したと考えられる (Virkkula & Nikula, 2010)。
 - ⁶ EMI とは English-Medium Instruction の略であり、すなわち専門科目を英語で教授する
授業のことを指す。なお、頻繁に引用される Dearden (2014) による定義によると、多
くの学生にとって英語が第一言語でない国々での授業に限定されているが、必ずしも
それは国際社会における実態にあつておらず、Murata and Iino (2018) や村田 (2021) は
より広義に、教員や学生がほぼ言語文化背景を共有している場合も含むべきだと主張
している。

参考文献

- Baker, W. (2009). Language, culture and identity through English as a lingua franca in Asia: Note from the field. *The Linguistic Journal*, 4, 8-35.
- Block, D. (2007). *Second language identities*. Continuum.
- Cogo, A. (2012). English as a lingua franca: Concepts, use, and implications. *ELT Journal*, 66(1), 97-105.
- Cogo, A. (2018). ELF and multilingualism. In J. Jenkins, W. Baker, & M. Dewey (Eds.), *The Routledge Handbook of English as a Lingua Franca* (pp. 357–368). Routledge.
- Creswell, J. W., & Poth, C. N. (2019). *Qualitative inquiry and research design: Choosing among five approaches* (4th ed.). SAGE Publishing.
- Dearden, J. (2014). *English as a medium of instruction—a growing global phenomenon: Phase 1*. The British Council.
- Dewey, M. (2013). The distinctiveness of English as a lingua franca. *ELT Journal*, 67(3), 346-349.
- Dörnyei, Z. (2007). *Research methods in applied linguistics: Quantitative, qualitative and mixed methodologies*. Oxford University Press.
- Hynninen, N., & Solin, A. (2018). Language norms in ELF. In J. Jenkins, W. Baker, & M. Dewey (Eds.), *The Routledge Handbook of English as a Lingua Franca* (pp. 594-605). Routledge.
- Iino, M., & Murata, K. (2016). Dynamics of ELF communication in an English-medium academic context in Japan: From EFL learners to ELF users. In K. Murata. (ed.), *Exploring ELF in Japanese academic and business contexts: Conceptualization, research and pedagogic implications* (pp. 111-131). Routledge.
- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language*. Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2007). *English as a lingua franca: Attitudes and identity*. Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2015). *Global Englishes: A resource book for students* (3rd ed.). Routledge.
- Jenkins, J. (2017). ELF and WE: Competing or complementing paradigms? In Ling, L. E., & Pakir, A (Eds.), *World Englishes: Re-thinking paradigms* (pp. 1-16). Oxon: Routledge.
- Jenkins, J., Cogo, A., & Dewey, M. (2011). Review of developments in research into English as a Lingua Franca. *Language Teaching*, 44(3), 281–315.
- Kohn, K. (2018). MY English: A social constructivist perspective on ELF. *Journal of English as a Lingua Franca*, 7(1), 1–24.
- Leppänen, S., & Nikula, T. (2007). Diverse uses of English in Finnish society: Discourse-pragmatic insights into media, education and business contexts. *Multilingua* 26(4), 333–380.
- Margić, B. D. (2017). Communication courtesy or condescension? Linguistic accommodation of

- native to non-native speakers of English. *Journal of English as a Lingua Franca*, 6(1), 29-55.
- Milroy, J. (1999) 'The consequences of standardisation in descriptive linguistics'. In T. Bex & R.J. Watts (Eds.), *Standard English: The Widening Debate* (pp. 16–39). Routledge.
- Murata, K. (2016). ELF research - Its impact on language education in Japan and East Asia. In M.-L. Pitzl & R. Osimk-Teasdale (Eds.), *English as a lingua franca: Perspectives and prospects. Contributions in Honour of Barbara Seidlhofer* (pp. 77–86). De Gruyter Mouton.
- 村田久美子. (2020). バイリンガル/多言語環境の中での(共通語としての) 英語(ELF)を媒介とした教育(M/E). *母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究*, 16(1), 1-23.
- Murata, K. (2021). Teaching WE and ELF in EMI from an ELF perspective: A case study at a university in the expanding circle. In Y. Bayyurt, & S. M. Yasemin (Eds.), *Bloomsbury World Englishes volume 3: Pedagogies* (pp. 159-176). Bloomsbury Publishing.
- Murata, K., & Iino, M. (2018). EMI in higher education: An ELF perspective. In J. Jenkins, W. Baker, & M. Dewey (Eds.), *The Routledge Handbook of English as a Lingua Franca* (pp. 400–412). Routledge.
- Murata, K., Iino, M., & Konakahara, M. (2017). An investigation into the use of and attitudes towards ELF (English as a lingua franca) in English-medium instruction (EMI) classes and its implication for English language teaching. *Waseda Review of Education*, 31(1), 21-38.
- Murata, K., Konakahara, M., Iino, M., & Toyoshima, N. (2018). An investigation into attitudes towards English as a lingua franca (ELF) in English-medium instruction (EMI) and business settings and its implications for English language pedagogy. *Waseda Review of Education*, 32(2), 55-75.
- Nogami, Y. (2020). *Identity and pragmatic language use*. De Gruyter Mouton.
- Norton, B. (2000). *Identity and language learning*. Pearson Education.
- Norton, B. (2013). *Identity and language learning: Expanding the conversation* (2nd ed.). Multilingual Matters.
- Saito, K. (2019). Exploring Japanese university students' awareness of WE and ELF: A case study. *Waseda Working Papers in ELF*, 8, 121-132.
- Saito, K. (2020). An Exploration into Japanese Secondary School Students' Awareness of ELF and Their Language Attitudes. *Musashi Bulletin*, 5, 3-16.
- Seidlhofer, B. (2011). *Understanding English as a lingua franca*. Oxford University Press.
- Seidlhofer, B. (2018). Standard English and the dynamics of ELF variation. In J. Jenkins, W. Baker, & M. Dewey (Eds.), *The Routledge Handbook of English as a Lingua Franca* (pp. 85–100). Routledge.

- Seidlhofer, B., & Widdowson, H. (2017). Competence, capability and virtual language. *Lingue e Linguaggi*, 24, 23–36.
- Takino, M. (2016). Using narrative inquiry in ELF research: Exploring BELF users' perspective. *Waseda Working Papers in ELF*, 5, 117-135.
- 田中藍渚&齋藤浩一. (2021). ELF使用者として国際社会とつながるために：大学生が持つ英語観からの考察. 杉野俊子ほか編『つながるための言語教育』（pp. 47-62）明石書店.
- Virkkula, T., & Nikula, T. (2010). Identity construction in ELF contexts: a case study of Finnish engineering students working in Germany. *International Journal of Applied Linguistics*, 20(2), 251–273.
- Widdowson, H. G. (1994). The ownership of English. *TESOL Quarterly*, 28(2), 377-389.
- Widdowson, H. (2015). ELF and the pragmatics of language variation. *Journal of English as a Lingua Franca*, 4(2), 359–372.